

未完の博士論文「調査・報道メディアの展望とそのビジネスモデル(仮称)」

—南 徹氏を悼む—

Doctoral Dissertation “Outlook of Research and News Media and Its Business
Models(Unfinished)” : Memorial of Mr. Minami Tohru

北 克一[†], ベンカテッシュ ラガワン^{††}

Katsuichi KITA[†], Venkatesh RAGHAVAN^{††}

抄録 南氏の知的関心は、情報がデジタル情報へと収束し、ネットワーク流通が加速する情報環境生態系での新聞事業を焦点とする知識を創造、流通させる業界の現状分析と将来展望であった。ご自身の実務経験での情報技術を取り巻く世界像を基礎に、持続が可能なビジネスモデルを構想される立ち位置は、南氏のオリジナリティに溢れた興味深い研究観点であった。南氏が残された 3 編の論文は、さながら未完の博士論文への道程標のごとくに思われる。

はじめに

南 徹氏のご逝去になられた。2014 年 6 月 9 日のことである。前夜にはご家族と団欒の会話をされていたと、ご令嬢より伺った。1 年と少しのご闘病の日々であった。

創造都市研究科修士課程、都市情報学専攻知識情報基盤研究分野に入学をされたのは 2008 年度のことであった。某新聞社で前半は記者として、後半はシステム開発責任者として 60 歳まで勤務され、すっぱりと退職をされての転身であった。研究科は社会人大学院なので大学新卒から南氏のような大ベテランまでが机を並べての勉学と研究の環境であった。

キャンパスは大阪駅前第二ビルの 6 階であったので、周辺一帯は講義やワークショ

ップの後の反省会(二次会)には不足のない好立地である。

講義終了後には有志が連れ立って、地下街に場所を写し、侃侃諤々の論議を続けていた。また時には、三次会へと流れ込み、グラス片手に論議は続いた。南氏の右手に焼酎ロックグラスという気に入りのスタイルは臉に焼き付いている。

修士課程を特に優秀な成績により 1 年間での短縮修了をされ、引き続き博士課程、創造都市専攻都市情報環境研究領域に進学された。後にご紹介する論文「SNS(Social Network Services)を利用した地方紙の新たなインターネット事業の創出—読者コミュニティの地域を超えた連携—」は、南氏の修士論文の圧縮版である。なお、この論文の延長上に同氏の未完の博士論文の姿がおぼろげにうかがうことができる。

博士課程在学中から、京都学園大学、奈

[†] 相愛大学共通教育センター

^{††} 大阪市立大学大学院創造都市研究科

良大学などの司書課程の非常勤を務められていた。20歳前後の受講者との感覚違いに戸惑いながらも、教えることの難しさを楽しんでおられたようにもお見受けした。特に亀岡の京都学園の帰路には、京都駅で途中下車をされ、旧職場関係の「悪友ども」との交流を楽しんでおられたようである。

突然のお電話を北宛にいただいたのは、2013年4月のことであった。普段はメールでのやり取りが中心であったので、いぶかしく思いつつ当日に駅で落ち合った。「どこかで一杯やりながら、…」と話しかけ始めたら、「実は呑めないので、…」と言葉を濁され、手近の喫茶店にはいった。そこで南氏より、入院、手術の必要があること、術後の療養などもあること、については現在の非常勤講師の交代者を至急手当したいことなどがお話の内容であった。言葉にならない驚きと、社会人としての責任感をお持ちであることに強い感銘を受けた。

同5月に手術をされ、その後は「病と二人三脚で…」と話しておられた。最後の連絡は、手術1年後の5月29日付のご療養中の南氏からのメールであった。

そして、2014年6月9日にご逝去された。今はただご冥福をお祈りしたい。

以下、本稿では南氏の未完の博士論文への道標をたどってみたい。

1. 博士論文への道程標

南氏の知的関心は、情報がデジタル情報へと収束し、ネットワーク流通が加速する環境下での、新聞事業を焦点にした知識の創造、流通産業界の現状分析と将来展望で

あった。ご自身の職業キャリア上での情報技術知識を基礎に、持続可能なビジネスモデルを構想する立ち位置は、オリジナリティに溢れた興味深い研究観点であった。

南氏が残された3編の論文は、さながら未完の博士論文への道程標のごとくに思われる。まずは、この玉稿を振り返ってみたい。

1.1 「SNS(Social Network Services)を利用した地方紙の新たなインターネット事業の創出—読者コミュニティの地域を超えた連携—」

本稿は『情報学=Journal of Informatics』Vol.6(1), 2009に掲載された¹⁾。同論文よりの抄録の引用を行う。

インターネット空間の出現によって情報環境が激変した。特に「Web 2.0」は濁流ともいえる勢いで既存のマスメディア、特に新聞に襲いかかっている。本研究では新聞を取り巻く情報環境の変化、日本、米国の新聞の現状を概観した。そんな中で注目したのが SNS (Social Networking Service)である。多くの先行研究で「インターネット上での人間関係を可視化するサービス」と定義され、地域コミュニティでも情報交換、情報共有の有力なツールとして活用されている。一方、日本には道府県に県紙とよばれる地方紙が存在し、地域メディアとして読者から受け入れられてきた。この地方紙が運営する地域 SNS が地域を越えて連携する SNS に「Coop・SNS」の仮称を与えて、その基本設計と事業モデルの創出を試みた。

次にここでの論点を整理しておきたい。背景となる情報環境の変容として、特に米国、欧州地域での新聞経営の危機がある。ネットワーク上に流通する様々なコンテンツの中で、従来は調査・報道の中心的なメディアであった新聞が、購読部数減少、広告収入の激減の危機に見舞われ、合併、身売り、廃刊などの危機が進行していた。一方、ハフィントン・ポスト²⁾に代表されるようなインターネット新聞が出現、台頭し、あらたなメディアの一角を占めていた。

論文では、若年層の新聞購読離れを背景に、すでに日本でも静かに進行している「新聞の危機」に対して、特に地方紙に着目し、地方紙が運営する SNS を地域コミュニティの情報交換、情報共有の有力なメディアとして位置づけ、この地域 SNS が地域を越えてゆるやかに連携する SNS を「Coop-SNS」と命名し、その枠組みの基本設計と事業モデルの創出を試みている。論考の射程は現在でも十分に有効であり、概念設計を拡大、敷衍すれば地域 SNS の多層的なコングロマリット・モデルへの射影も考えうる。また逆に、第一次展開区間を一定の地域圏と位置付ければ、地域振興の多層協同モデル、情報交換コモنزの創出にも延伸できよう。

なお、本稿の元になった南氏の修士論文は、その学業成績と共に特に優秀と評価され、同氏は修士課程を1年間の短縮修了をされた。同年度は、1名のみ修士課程の短縮修了であった。

1.2 「米国の書店チェーン倒産による読書環境の変化と日本の電子書籍ビジネス—ボーダーズの閉店に遭遇して—」

本稿は『情報学=Journal of Informatics』Vol.8(2), 2011 に掲載された³⁾。同論文よりの抄録引用を行う。

全米 2 位の大型書店チェーン「ボーダーズ」が倒産して、2010 年末の 640 あまりの店舗が約 9 カ月後の 2011 年 9 月には全て閉店した。一方、米国では全米 1 位の「バーンズ&ノーブル」が約 700 店舗を展開しているものの、ボーダーズの閉店によって書店チェーンの店舗が消えた地域が点在すると推測される。それらの地域に住む多くの読者は、オンライン書店、電子書籍の利用を強いられることになる。受け皿ともいえるバーンズ&ノーブル、アマゾンの動向を考察し、同時に電子書籍ブームとされる日本の読書環境の現状を概観したが、電子書籍ストアの乱立など整備は進んでいない。

論文では、最初にボーダーズ倒産の経緯をまとめ、続いて Chapter11(自己破産)申請後の読者の読書環境の変化について、ハワイ諸島を具体例に示している。論文は考察を次のように締めくくっている。引用で示す。

このような大型の書店チェーンが営業していない地域の“リアル書店派”は地元の独立系書店を利用するしかない。しかし、日本と同様に米国でも小規模の書店の減少は続いている。ボーダーズの強みであった「書店で思わぬ本に出会う楽しみ」が奪われ、オンライン書店で購入するか、いっきに“電子書籍派”に転

向するか。選択肢は限られ、従来の読書環境の変化を求められることになる。(p.25)

続けて、論文は「バーンズ&ノーブルの戦略と経営実態」を取り上げ、「薄氷を踏む経営環境」(p.27)を論じる。

さらに「米国の書籍販売の現状」を素描し、「一段と攻勢を強めるアマゾンの電子書籍ビジネス」へと論を進めている(p.27-28)。著者の結語は次である。

電子書籍を巡るアマゾン、アップル、グーグルのプラットフォーム争いに関しては詳しくは触れないが、この3社の今後の争いが、店舗販売が総売上高の70%強を占めるバーンズ&ノーブルの命運を握っているのは確かだ。

最後に論文は、「日本の電子書籍ビジネスは?」と自問し、「紙の書籍でも電子書籍でも消費者に優良なコンテンツを届けることができなければ、日本の「新しい章」は重苦しい文章で記されることになるのではないだろうか。」(p.30)と結語している。

論考の流れは巧みであり、調査報道に裏付けられた内容である。ジャーナリズムのなんたるか的一端を垣間見る思いである。

なお、リアル書店全米1位の Barnes & Noble 社は、独自の電子書籍端末 Nook の販売を新興企業に任せ、他からの新たな資本導入を図っている⁴⁵⁾。

1.3 「新聞・出版の製作工程における技術革新と新たなビジネスモデル構築の不連続性について」

本稿は『情報学=Journal of Informatics』Vol.10(2), 2013 に掲載された⁶⁾。同論文よりの抄録の引用を行う。

既存マスメディアの新聞と出版が停滞している。いずれも、ペーパーメディアとして15世紀半ばから続いた活版印刷による製作からコンピュータによる製作へという技術革新に取り組んだ。しかし、この過程でデジタル・データやネットワークに関する技術を習得しながらも、情報ネットワーク社会における新たなビジネスモデル構築には結び付けることができていないのが現状である。なぜ足踏みを続けているのか。技術に視点を据え、その原因を探った。

本論は大きく、3つのブロックから形成されている。前半は、「製作過程のデジタル化以前の技術改良」、中盤は「新聞・出版の制作過程におけるデジタル化」および「デジタル化によって得た成果」であり、後半で「情報ネットワーク化初期のペーパーメディアの対応」と「ペーパーメディアとケータイビジネス」および「情報ネットワーク社会におけるペーパーメディアの現状」と展開している。

対象の時間軸は、南氏の社会での実務経験と重なっており、自家薬籠中のテーマ展開である。最後に論考は次の結語で締めくくられている。

情報ネットワーク社会の出現は、新聞、出版だけではなく、あらゆる既存メディアにとっては、『イノベーションのジレンマ』⁷⁾の著者であるクレイトン・M・

クリステンセンの言葉を借りれば、まさに「破壊的変化に直面」していると言える。同氏が指摘する「偉大な企業はすべてを正しく行うが故に失敗する」が、新聞、出版の企業経営にも当てはまるのなら、失敗しない残された道は「すべてを正しく行う」のではなく、「紙」のコンテンツと断絶し、コンテンツの大胆な見直しに注力するダイナミズムにあふれた企業戦略への転換ではないだろうか。

このように南氏の関心は技術を抑えながらも、持続可能なビジネスモデル構築にあった。私見になるが、私たちは南氏の3つの論考と通して、南氏の博士論文として、21世紀の新しい『メディアの興亡』⁸⁾を夢想してい

たのかもしれない。

2. 未完の博士論文「調査・報道メディアの展望とそのビジネスモデル(仮称)」

以上の3編の南氏の論文を敷衍してみると、見えてくるものがある。それは「社会的な意味」と「持続可能性」と考える。

分析的な視点は、1) ジャーナリズムの今日的意義と役割、2) 技術内容の検証、3) コンテンツの質の保証、4) ビジネスモデルとしての持続可能性、の厳しい検証にあったと考える。もしそうであるならば、未完の博士論文は次の構成ではなかったろうか。以下は、在りし日の南氏の笑顔を浮かべながらの勝手な「夢想」です。お許しください。

大阪市立大学大学院創造都市研究科博士学位論文[仮説]

調査・報道メディアの社会意義と持続可能なビジネスモデル(仮題)

南 徹

Doctoral Dissertation “Outlook of Research and News Media
and Its Business Models(Unfinished)”

Minami Tohru

はじめに

1. ジャーナリズムの成立と変容—歴史と現状—

- 1.1 印刷技術と新聞、雑誌の誕生
- 1.2 放送技術とラジオ、テレビの普及
- 1.3 情報通信技術とインターネットの定着
- 1.4 ジャーナリズムとメディアの本質
- 1.5 インターネット時代のジャーナリズムの意義と役割

2. 新聞を取り巻く環境と「塹壕戦」、新たな展開

2.1 メディアとしての新聞

2.2 新聞経営モデルの類型と現状分析

2.3 新聞社の対応類型とその評価軸

2.4 総合的情報パッケージから、コンテンツのアンバンドル化、テラーメイドへ

3. 新しい挑戦—市民メディアとまとめサイト—

3.1 市民メディアの展開—Blog、SNS、そして新しい「新聞」—

3.2 事例研究：米国「ザ・ハフィントン・ポスト」

3.3 事例研究：日本「ヤフー・ニュース」

3.4 地域コミュニティの再生と地域メディアの連携

3.5 国際通信会社の新たな役割

3.6 遍在する「市民記者」とメディアのグローバル展開

4. 塹壕から出でよ—企画と取材、編集の知性—

4.1 新しい技術と「メディア」の登場

4.2 知識情報社会でのメディア価値

4.3 企画と取材、編集の知性

4.4 組織力と専門職

5. ジャーナリズムの必要性、存在意味—弱者連帯を超えて—

6. さいごに

謝辞

3. 南氏を悼む

余りにも早いご夭折であった。にこやかなお人柄、鋭い状況把握、常に創造的であろうとのチャレンジ精神とそれを支える深い知識と教養。私たちは得難い先達を失った思いで茫然自失としている。しかし、南氏の笑顔と鋭い認識を想起しながら、残された私たちは牛歩の歩み続けることをご霊前にお誓いしたい。(合掌)

注)

1) 南徹「SNS(Social Network Services)を利用した地方紙の新たなインターネット事業の創出—読者コミュニティの地域を超えた連携—」『情報学 = Journal of Informatics』 Vol.6(1), 2009.

<http://kito.info.gsec.osaka-cu.ac.jp/JI/issue/view/8> [確認：2014年09月15日]

2) 2005年5月に設立されたハフィント

ン・ポストは、アメリカ合衆国のリベラル系独立のインターネット新聞である。様々なコラムニストが執筆する論説ブログおよび各種オンラインメディアからのニュース・アグリゲーターで、政治、メディア、ビジネス、エンターテインメント、生活、スタイル、自然環境など広い分野を扱う。

(ウィキペディア日本語版「ja.wikipedia.org/wiki/ハフィントン・ポスト」をもとに記述)

同新聞の日本語版は、<http://www.huffingtonpost.jp/> [確認: 2014年09月15日]

また、これに朝日新聞社が関与している。同新聞社は次のように報じている。<http://www.asahi.com/shimbun/csr/topic1/topic1a.html> [確認: 2014年09月15日]

朝日新聞社は2013年5月、米最大級のニュース・ブログサイト「The Huffington Post (ザ・ハフィントン・ポスト)」を運営するAOL傘下の「The Huffington Post Media group」と、合弁会社「The Huffington Post Japan」を設立し、日本版「ザ・ハフィントン・ポスト」を開設しました。ネット上で、ユーザーが活発に意見を交す「オピニオン・フォーラム」をつくりだそうという新たな取り組みで、この春からスタートした朝日新聞社の「未来メディアプロジェクト」を象徴する事業です。

日本版「ザ・ハフィントン・ポスト」は米国版と同様、速報、まとめニュースやブログ、ソーシャルメディアを総合的に組み合わせたニュース・ブログサイトです。ニュースの分野は政治や経済、国際問題、社会問題など多岐にわたります。ネット上で話題となったニュースに迅速に対応するの

が大きな特徴の一つです。

また、たくさんの方々から寄稿されるブログが、このサイトを骨太にする役割を担っています。岡田克也、枝野幸男、石破茂、野田聖子、田原総一郎、森達也、堀江貴文、佐々木俊尚、中村伊知哉の各氏ら、政治家やジャーナリスト、学者、ブロガー、多種多様な専門家らが、自分たちの意見表明の場として、ハフポを活用しています。

ニュースやブログに加え、ソーシャルメディアを活用し、専門家やユーザー間での活発な議論や意見交換による「オピニオン・フォーラム」の提供を目指します。このサイトの目的は「言論・表現の自由を貫き、新聞をはじめ多様なメディアを通じて公共的・文化的使命を果たす」(朝日新聞社行動規範から抜粋)という朝日新聞社の基本方針と合致します。

朝日新聞社は日本版「ザ・ハフィントン・ポスト」へ記事や写真を提供していますが、内容については「ザ・ハフィントン・ポスト日本版」の編集部が独立して編集権を持ち、日々ニュースを追いかけています。

米国版「ザ・ハフィントン・ポスト」は創業からわずか8年で、月間約5千万人の利用者を誇るサイトへと急成長を遂げました。英国、フランス、イタリア、スペインなど各国でも展開しており、アジアでは日本が初進出となります。

ぜひ「ザ・ハフィントン・ポスト日本版」にご期待ください。

また、この「ザ・ハフィントン・ポスト日本語版」への出資、提携意図について、朝日新聞社社長の木村伊量は、次のように述べている。

アメリカでナンバーワンのウェブでの言論空間と組んで、朝日新聞のジャーナリズムの外縁を広げようということです。朝日新聞というブランドを、若い人にも広げたい、新聞をよく見たことがないという人に、新聞の未来を感じてもらえればと考えたのです。

(中略)朝日新聞がコントロールすることは一切ないし、編集にも関与していません。編集権は独立しています。ハフィントン・ポストは私たちにないものを持っています。それはオピニオンを再生産する力であり、さらにそれを良質のものにするトランスフィルター技術です。私たちはその技術やノウハウを、彼らから学んで自社にフィールドバックしてだけです。

長澤秀行編著『メディアの苦悩-28人の証言-』(光文社新書; 695)光文社, 2014.5, p.46.

3) 南徹「米国の書店チェーン倒産による読書環境の変化と日本の電子書籍ビジネス—ボーダーズの閉店に遭遇して—」『情報学=Journal of Informatics』 Vol.8(2), 2011.

<http://kito.info.gscc.osaka-cu.ac.jp/JI/issue/view/11> [確認: 2014年09月15日]

4) 『日本経済新聞 電子版』2014年6月26日 7:14.

「書店のバーンズ・アンド・ノーブル、電子書籍事業を分離」

2014/6/26 7:14 [有料会員限定]

米書店チェーン大手のバーンズ・アンド・ノーブル(B&N)は25日、電子書籍端末「ヌック」関連の事業を分社化すると発表した。米アマゾン・ドット・コムなどとの競争激化を背景に低迷が続く電子書籍事業の分離により、業績を改善させる狙い。分離は2015年3月末までに完了する見通し。

同時に発表した2014年2~4月期決算は最終損益が3,670万ドル(約37億円)の赤字だった。売上高は前年同期比4%増となったが、販売管理費が膨らみ収益を圧迫した。事業部門別では電子書籍事業「ヌック」の売上高が前年同期から2割も減少するなど不振が目立った。

また、2014年7月5日にロイター(Reuters)は、次のようにヌック事業の韓国サムスン電子との提携を報じている。

米書店チェーン、バーンズ・アンド・ノーブルは、赤字の電子書籍端末「ヌック」事業の立て直しに向け、韓国サムスン電子と共同で新型のタブレット端末を開発する。
<http://jp.reuters.com/article/marketsNews/idJPL3N0ON0QV20140606>

[確認: 2014年09月15日]

5) “OnDeck”, Vol.110, 2014.06.26.

http://on-deck.jp/weekly/jun14/ondeck_w110.epub [確認: 2014年09月15日]

経営不振のB&Nをサムスンとマイクロソフトが救うか?

米国の大手書店チェーンで電子書籍のプラットフォームも持つバーンズアンドノーブル(B&N)社が次期の電子書籍リーダーをサムスン社と共同開発し、ギャラクシータブ4ヌックという名称で発売する。本誌でも折にふれて扱ってきたが、B&N社は現在も経営不振、特に電子書籍事業での不振が伝えられている。もちろん、アマゾン社のキンドルには大きく引き離されている。しかし、B&N社はマイクロソフト社から出資を受けいれたり、リストラ策としての電子書籍リーダーの自社開発から撤退したりすることを発表してきた。今回のサムスンとの提携は具体的な結果の1つだ。ただ、

疑問なのはマイクロソフト社が B&N に出資しているのに、具体的な提携関係を築けていないことだ。いまやマイクロソフト社はノキア社を傘下に収めていたり、独自ハードウェアのサーフェスを設計・発売したりしているにもかかわらず、電子書籍閲覧環境は含まれていない。しかし、マイクロソフト社はドキュメントの一部を EPUB 形式で発行している。出版業界ではブランドのある書店チェーンだけに、電子書籍分野でもそれなりの可能性はまだあると思うのだが…。

6) 南徹「新聞・出版の製作工程における技術革新と新たなビジネスモデル構築の不連続性について」『情報学 = Journal of Informatics』 Vol.10(2), 2013.

http://kito.info.gscc.osaka-cu.ac.jp/JI/issue/view/151_ [確認：2014年09月15日]

7) クレイトン・クリステンセン著, 伊豆原弓訳『イノベーションのジレンマ-技術革新が巨大企業を滅ぼすとき-』翔泳社, 2001.7.

8) 杉山隆男 著『メディアの興亡』文芸春秋, 1986.6.

補遺 I

南 徹氏 大阪市立大学大学院創造都市研究科との関わり

平成 21 年 4 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市情報学専攻 知識情報基盤研究分野	入学
平成 22 年 3 月	同	1 年での短縮修了
平成 22 年 4 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科後期博士課程 創造都市専攻都市情報環境研究領域	入学
平成 25 年 3 月	同	単位取得退学
平成 26 年 6 月 9 日	ご永眠	

論文

1. 南徹「SNS(Social Network Services)を利用した地方紙の新たなインターネット事業の創出—読者コミュニティの地域を超えた連携—」『情報学 = Journal of Informatics』 Vol.6(1), 2009.
<http://kito.info.gscc.osaka-cu.ac.jp/JI/issue/view/8> [確認：2014年09月15日]

2. 南徹「米国の書店チェーン倒産による読書環境の変化と日本の電子書籍ビジネス—ボーダーズの閉店に遭遇して—」『情報学 = Journal of Informatics』 Vol.8(2), 2011

<http://kito.info.gscc.osaka-cu.ac.jp/JI/issue/view/11> [確認：2014年09月15日]

3. 南徹「新聞・出版の製作工程における技

術革新と新たなビジネスモデル構築の不連続性について』『情報学=Journal of Informatics』 Vol.10(2), 2013
<http://kito.info.gsec.osaka-cu.ac.jp/JI/issue/view/151> [確認：2014年09月15日]

P/W: xxxyyyzzz

写真のサムネイルが表示されます。写真をダウンロードする場合は、画面下部の左側のボタン、スライドショーで見る場合は中央のボタンを押下してください。

補遺 II

南 徹

以下は、北の退官記念の集いの時に、南氏が撮影取材班で記録をいただいた写真集です。

ピント、構図はさすがプロの技、参加者の全員が何回か写っているのは、南さんの温かい気配りだと思います。

なお、写真から3次会の解散までが撮影いただいたようです。感謝です。

*パスワードは北ゼミの標語ですが、不明な方は直接に次にお問い合わせください。

kita_at media.osaka-xxxxxxx.

概ね、1年半前だったのですね。

北 先生
北ゼミの皆様

南です。

先日16日の北先生退官記念の最終講義、パーティー、皆様と楽しく、そして寂しさも感じる時間を共有できました。あらためて、北先生、北ゼミの皆様には感謝いたします。

さて、当日、撮影しました写真をニコンの写真共有サイト「NIKON IMAGE SPACE」にアップロードしました。下記のURLにアクセスして、パスワードを入力してください。

URL: <http://img.gg/2a9i4ge>